春るさめ 寂かに歩む若人が 地は銀鼠にたそがるる 街路の灯はなやかに 心にめざむ爽かの に濡るアカシヤ花

み充てる力かな

碧薄れゆく空にうく 融けざる銀の山脈は 猟虎の骨に 鷗飛ぶ 夏の入陽に砂丘のなっいりひしかなっかりないからないからないからない

名なである。

の方を思ふかな の光身にあびて

王<sup>おうじゃ</sup>

の誇偲ぶかな 「の酒を汲み交し、 \*\*\*

琥: 珀ぱ

灯漂ふアイヌ小屋ともしびふる 雪の野限は靄こめてゆき のずゑ もや 石狩の河波光る 青き空透き銀の月

几

焚きび 今宵は淡き夢見 谷また谷を辿り行きたと 落葉ふむ音寂 仄青白き白樺 ほのあおじろ しらかば を囲む こくも

紫紺の闇に解けて行く 四み歌ふ寮歌 んと